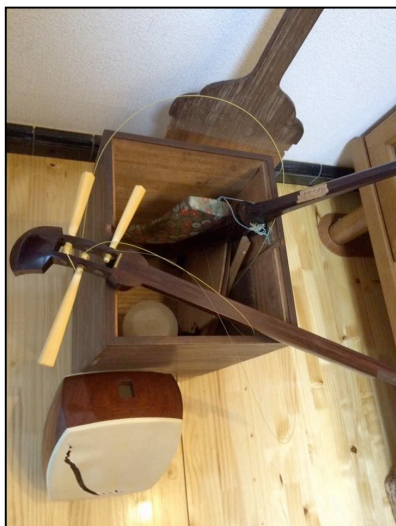


|   |  |  |
|---|--|--|
|  | <h1 style="text-align: center;">日本髪と三味線</h1> <p style="text-align: center;">SCE・Net 横山哲夫</p> | <p style="text-align: center;">E-99</p> <p style="text-align: center;">発行日<br/>2017.6.19</p> |
|---|--|--|



最近、祖母が使っていた三味線の皮を張りかえた。本来、犬や猫の皮を使うそうだが、愛犬家の私としてはとても使えない。現代は21世紀、犬や猫の皮にかわる材料がきっとあるはずである。ネットで調べたら、素晴らしい材料が見つかった。ファイバー・クラフト紙である。水を含むと伸び、乾燥すると、もとに戻る。もとに戻る時に強い張力が働くので、三味線の皮にもってこいである。

「ファイバー・クラフトと友禅和紙でつくるリサイクルの和太鼓と江戸玩具」なる長い題名の本を買って、皮張りに挑戦してみることにした。一度目は失敗したのだが、二度目は上手くいった。私が十七歳の時に亡くなった祖母の三味線が、よみがえった。早速、

長唄を習っていた叔母(とうに八十歳は越えている)に、三味線の音を聞いてもらった。「犬の音だね」と言われた。「犬」の皮は練習用、「猫」は発表会用だそうだ。素っ気ない叔母の言葉に、動物の皮は使っていないのだが、可哀想な犬や猫の顔が頭に浮かんだ。しかし、満足である。

あらためて三味線を眺めてみた。職人の技が光る。花梨(かりん：硬くて変形し難い木)で作られた胴、胴に差し込まれている棹(さお)は、作られてから60年以上経過しているのに、全く狂いが無い。特に天神(てんじん)と言われる糸巻きの部分は、絶妙な曲線で、棹と一体化している。糸巻きは象牙できていて、金の金具にさしこまれている。見ていて飽きない。芸術品である。

しかし、何かに似ている。黒く輝く棹から続く天神、その天神を中心に左右に配置されている象牙の糸巻き。日本髪を結った女性の黒髪と簪(かんざし)に似ていると思うのは私だけだろうか。日本髪と三味線、きつとなにか関係があるのではないかと思い、調べてみることにした。

話は変わるのだが、宮崎駿の有名なアニメに「千と千尋の神隠し」がある。湯屋(銭湯)に集まって来る八百万(やよろず)の神々と「千尋」と言う女の子のファンタジーである。一神教の多い世界にあって、八百万の神々がいる日本と言う国は、ある意味、異質である。森羅万象(宇宙にあるいっさいのもの)、全ての物に神が宿る日本。大きな石や木が神の象徴になり、風や雷も神である。湯島天神では、菅原道



真公も学問の神様として祀られているのだから、人も神様になれる。三味線の糸巻きの部分も天神、つまり神様なのだ。

日本文化の多くが大陸から渡ってきたように、日本髪のリーツも中国から渡来した。平安時代には、束ねずに下ろす髪形になったが、江戸時代に入ると現代にもつながる「島田」「桃割れ」、明治時代には「二百三高地」などと言う、何か物騒な髪形もあった。それらのなかに、「布(きれ)天神」と言う髪形が現代日本に残っている。天神。強引なようにも思えるのだが、「天神」がキーワードで日本髪と三味線がつながった。しかし、なにか面白くない。

ことは、三味線の皮張りから始まったのであるから、三味線に戻ろうと思う。三味線のリーツも大陸である。中国ではサンシェンと呼ばれ、琉球を経て、日本に渡って来た。今の形になったのは、秀吉が淀君のために作らせた「淀(銘)」が最初である。胴には素晴らしい蒔絵(まきえ)が施されている。明治維新の志士や新選組の近藤勇や沖田総司たちもここで談論したと言う、京都島原の揚屋「角屋」が所蔵している。秀吉の最後の遺品であるとも言われているが、豪華な蒔絵が施してあるとは言え、かたちは現代の三味線とかわりない。この三味線は、秀吉の命により、慶長二年三月(1597年)、京都の名工、神田治光が作ったもので、その後、朝鮮の役で一番槍を争った越後梁川藩の家臣が、淀君から拝領したとの事実もあり、今に残る日本最古の三味線である。

明治維新の立役者と言えば桂小五郎である。芸者「幾松」に命を助けられ、最後は明治政府の要人になった。桂小五郎の妻となった幾松も、当時、列強諸国に日本の力を見せるつける目的から作られた社交場「鹿鳴館」の花となった。また、桂が新撰組に追われ、窮地に追い込まれたとき、幾松は彼を長持ちのなかに隠した。近藤勇が長持ちのなかを確かめようとしたとき、幾松は三味線の撥(ばち)で近藤の手を払ったという。そして、「この長持ちのなかに、どなたもいないとなれば、近藤はん、責任とって、この場で切腹してくれはりますか。」とたんかを切って、桂を救った。(近藤勇は長持ちのなかに小五郎がいるとわかっていて。しかし、幾松の気迫に感じ、そこを去っていった。私はそう思う。)秀吉、淀君、桂小五郎、幾松、そして、桂の同志であった高杉晋作は、三味線が好きで戦場に持って行ったという。「三味線」に歴史ありである。

しかし、一つ疑問がわいた。前述したように、三味線が今の形になったのが秀吉の時代、江戸時代に長唄や文楽の伴奏楽器として大衆に広まっていったのだが、江戸時代が始まってから80年あまりたった1685年、五代将軍、徳川綱吉の命により「生類哀れみの令」が發布された。「ボウフラを殺さないために打ち水には注意せよ。」とまで、過激になった悪法だが、その間、犬や猫の皮を使っていた三味線は一体どうなってしまったのか。その記述は、見つからない。綱吉を戒めるため、水戸の御老公が犬の皮を送ったとの逸話もあり、皮のなめしを生活の生業としていた、悪法とは関係のない世界があったようにも思う。



しかし、日本髪と三味線につながる「何か」は見つからなかった。わたしの思い込みであったのかも知れない。ただ、ネットでいろいろと探っていると、安藤広重の「三味線を弾く女」と言う題名の浮世絵を見

つけた。江戸の芸者が三味線を弾こうと、弦を張るあでやかなすがたを描いている。この浮世絵の中心は明らかに芸者の結っている「日本髪」と「三味線」であると思う。

浮世絵は西洋絵画とは異なり、輪郭線が重要な役目を担っている。女性の繊細で美しい姿と三味線の天神が曲線で描かれ、安藤広重の技が光る。簪(かんざし)に飾られた日本髪、芸者の膝のうえに置かれた三味線、しなやかな指で糸巻きをにぎる芸者の姿、実に繊細で美しい。

結局、日本髪と三味線がつながる証拠は見つからなかったが、秀吉の命によって三味線を作った神田治光も、淀君のあでやかな姿を頭に描きながら、三味線を作ったに違いない。

胴にサギが飛ぶ蒔絵をほどこした「淀」、写真ではなく、実物を見てみたい。



#### 参考資料

1. 小山春良 著 「ファイバー・クラフトと友禅和紙でつくるリサイクルの和太鼓と江戸玩具」  
日本ボーグ社
2. ウィキペディア 「三味線」  
三味線を弾く女(喜多川歌麿「江戸の花 娘浄瑠璃」)
3. 角屋もてなしの文化美術館 ホームページ
4. 田辺尚雄 著 「淀」の三味線について 東洋音楽研究所